

バレイショ収量予備調査(7月23日)の結果に関する考察

2018年度のバレイショ圃場各区への施肥量は下記のとおりであった。

	区の種類	N (kg/10a)	P ₂ O ₅ (kg/10a)	K ₂ O (kg/10a)
1	パールユーキ単独区	6	3	1
2	パールユーキ+PK 補給区	6	20	12
3	化学肥料 NPK 標準施肥区	6	20	12
4	配合肥料バレイショ用2号 施肥区	6	28.9	12

1. 草丈の平均および地上部重量の平均は、上記の1から3の区の間では有意差が認められなかったが、4の配合肥料区では有意に増大していた。4はリン酸の施肥量が3よりも約45%多いので、リン酸が地上部の生育を促進させたものと考えられる。
2. 各区のバレイショの収量とバレイショの1個当り重量の平均は、パールユーキ単独区とパールユーキ+PK補給区の間、および化学肥料NPK標準施肥区と配合肥料バレイショ用2号区の間で有意差を示さなかったが、化学肥料施肥区(3と4)は有機肥料施肥区(1と2)よりも有意に収量が増大していた。有機肥料区では、窒素成分が土壤中で無機化してから作物に吸収されるため、今年のような低温条件下では、有機態窒素の無機化が遅れたため、バレイショ塊茎の肥大が遅れたものと考えられる。1区と2区を比較すると、リン酸およびカリの補給はジャガイモの肥大にほとんど貢献しなかった。化学肥料は有機肥料と比べて即効的であるため、バレイショの塊茎にも急速に吸収されて肥大をもたらしたものと考えられる。3と4区に有意差がなかったことから、リン酸の施肥量を多くしても収量にはあまり貢献しなかった。
3. 塊茎重量の分布
有機肥料施肥1および2では20g以下の小イモが多かった。これに対して化学肥料施肥区3および4では100g以上のイモがかなり含まれた。また、化学肥料施肥区では50-60gのイモが最も多かったのに対して、パールユーキ区では30-40gのイモが最も多かった。

7月30日のバレイショ収量調査について

中央の3番目と4番目の畝のイモを収穫する。

まず3番目と4番目の畝の地上部分を全て刈り取って畑の外に出し、堆肥場に運ぶ。この際両側の畝のジャガイモ地上部を傷つけないように注意する。また、周辺の畝に疫病のような症状がでている葉があったら、一緒にちぎり取って廃棄する。

その後、畝の土を少しずつ注意深く崩しながらジャガイモを収穫する。収穫したイモは畝ごとに別々のコンテナに入れる。

コンテナに収穫したジャガイモの重量を測定する。

各畝の収量を6倍すれば25平方メートル当たりの収量になり、240倍すれば1000平方メートル当たりの収量となる。

残った畝のうち、一番東側の畝は生育具合をチェックするために使用するが、適宜収穫して持って帰っても良い。

東側から2番目と、5番目、6番目の畝は今後ジャガイモがもっと肥大してきたら適切な時期に収穫する。収穫の日は知らせます。

バレイショ圃場の防除の記録

6月18日	レーバスフロアブル 1000倍	
	+ オルトラン 300倍	5リットル
6月26日	ジマンダイセン 100倍	
	+ オルトラン 300倍	5リットル
7月4日	レーバスフロアブル 1000倍	
	+ オルトラン 300倍	5リットル
7月11日	レーバスフロアブル 1000倍	
	+ オルトラン 300倍	5リットル
7月18日	ジマンダイセン 100倍	
	+ ペイオフ 1000倍	5リットル
7月25日	ジマンダイセン 100倍	
	+ オルトラン 300倍	5リットル